

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和5年度学校評価 結果・学校関係者評価

達成度（評価）	
A	十分達成できている
B	おおむね達成できている
C	やや不十分である
D	不十分である

学校名	佐賀市立成章中学校
1 前年度 評価結果の概要	・学力の向上については、主体的・対話的で深い学びを目指した授業実践に『学び合い』を事例に取り組んだ。心の教育については、いじめの早期発見、早期解決のための「そ・し・き・人 対応」を行い、重大事案は防止できた。一方、前年度に気づけなかった、人間関係のこじれからの転校や、不登校の増加が課題となった。
2 学校教育目標	心豊かに 自他を高め 章(あや)を成す 成章の心(世の中を明るく照らす明るい心で、弱いものを助け自らのプライドを高める正しい心で物事を判断・行動し、誠心誠意の姿に感動する美しい心)で自らの良さを伸ばすとともに他人の良さを尊重する。それぞれの良さを織りなし、美しく物事を成し遂げることで、絆感(居場所のある安心感、仲間への信頼感と思いやり、多様な考えを尊重する人権感覚で結ばれた感覚)や3観点の学力を獲得する。
3 本年度の重点目標	(1)【不登校対策】学校経営グラウンドデザイン(以下GD)の生徒指導1, 2, 3を実践し、生徒一人一人に絆感を育む (2)【学力向上】学校経営グラウンドデザイン(以下GD)の教科指導1, 2を実践し、県平均等と比較して学力向上を果たす。

4 重点取組内容・成果指標				5 最終評価		主な担当者		
(1)共通評価項目				最終評価				
評価項目	重点取組	成果指標(数値目標)	具体的取組	達成度(評価)	実施結果		学校関係者評価 評価 意見や提言	
●いじめ・不登校対策	●◎児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動。 学校経営グラウンドデザイン(以下GD)に示した、生徒指導1, 2, 3をあらゆる教育の場で実践。一人の個を生かすのは、周りの仲間が作る環境であるという観点から、個別支援だけでなく、集団の環境づくりのための指導を重視して取り組む。	①学校評価等で絆感を意識して生活した生徒8割以上 ②QUで要支援群減少、満足群増加率90%。自殺念慮等、要支援群への手立て実施100% ③「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童生徒80%以上	①生徒指導の3機能を、日々の教育実践で意識して指導に当たる。 ②開発的生徒指導に問題に対処しつつも良さを並行して生かす生徒指導として常に「出番→役割→承認」のサイクルを意識し学校行事や生徒会活動などを行う。	A	・アンケートから、絆感を意識して生活した生徒は、80%以上であった。 ・QUで要支援群、自殺念慮等への手立て実施100%おこなうことができた。 ・「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした生徒は70%だった。 ・生徒会を中心に、主体的に活動することができた。特に、佐賀駅前のごみ拾いボランティアは生徒自ら企画し、多くの人数で実施することができた。	A	・いじめの内容もSNSを使ったり気付くことができたり難しかったりするものが増えて、先生方の負担も大きいと思います。不登校の生徒やその家族ともよく関わっていい関係作りにつなげていってほしいと思います。 ・情報テラシー教育を全職員が共通理解のもと実施している。 アンケートの結果は上々で素晴らしいと思う。いじめに関することは学校内において先生方の意識疎通が図られていることが伺える。	
	●いじめの早期発見、早期対応体制の充実 そのために、そ・し・き・人対応の実践 そ：早期把握 し：初期全力対応 き：記録対応 人：人権意識高く、多様性を認め組織で対応	①いじめの重大事案と発展してしまうケースをゼロにする。	①相手の立場への共感に基づく、一人一人の多様性を認め、人に上下はない考え方を日々の実践を通して生徒に手を変え品をお変えて伝える。人は、立場によって同等ではないが、立場を超えた時、人としては対等 ②いじめ情報のアンテナを鋭敏にし、そしき人対応を実践 ③いじめ防止対策委員会年間3回	①相手の立場への共感に基づく、一人一人の多様性を認め、人に上下はない考え方を日々の実践を通して生徒に手を変え品をお変えて伝える。人は、立場によって同等ではないが、立場を超えた時、人としては対等 ②いじめ情報のアンテナを鋭敏にし、そしき人対応を実践 ③いじめ防止対策委員会年間3回	A	・いじめにつながりそうなる人間関係トラブルも発生したが、小さいうちから丁寧に組織で対応することができた。特に、SNSを使ったトラブルが増えている。その対応として、早期発見だけでなく未然防止のために定期的に情報テラシー教育を行うことができた。	A	・夢や目標を持ち、絆感を意識して生活している生徒が90%以上、生徒自身が企画し、ごみ拾いボランティア活動を実施。 ・学校目標にもつかりと掲げられていて、自分だけではなく相手のことも考えられるよう伝えられていると思います。 ・生徒や保護者の思いをくみ取ることが大切なことであると思います。大変であると思いますがこれからも頑張ってください。
	●5月連休明け、9月、1月などの孤立感による不登校が増加しやすい時期の前に、生徒指導部の連携・協働によって、手立てを計画的に講じ、実践する。 観察→方向づけ→実践→評価	①中学校入って不登校になる割合を、多い学年で1%未満に抑える。 ②不登校の生徒でも、学校の誰かと絆があると感じている生徒の割合を知り、次年度からの向上目的とする指標とする。 ③「先生はあなたの上のところを認めてくれていると思う」と回答した児童生徒80%以上	①生徒指導部からの「成章の心」、教育相談部からのたより、等の各種便りを通じて、集金や個別の連絡を通じて、集団として、絆感を高めたり、多様性を尊重したりする意欲を高めるとともに、個が集団の中で自己存在感を高められるようにメッセージを送る。	①生徒指導部からの「成章の心」、教育相談部からのたより、等の各種便りを通じて、集金や個別の連絡を通じて、集団として、絆感を高めたり、多様性を尊重したりする意欲を高めるとともに、個が集団の中で自己存在感を高められるようにメッセージを送る。	A	・年間を通じて、教育相談便りやカウンセリング、「7時のつどい」の参加、関係機関につながる想いを知ることができ、安心して学校生活を送ることができたケースが増えた。また、保護者アンケートにも、楽しく学校生活を送ることができているという回答が多い。不登校を未然に防いだり減らしたりする方法を今後も考え、職員と情報共有をしながら実践していきたい。	A	・出番→役割→承認のサイクルを意識して取り組まれたことは大変良いことだと思います。 ・生徒達を承認する機会をたくさん増やして自己肯定感を高めてほしいです。 ・学校内外の多様な人々との交流を通した「心の教育」を推進してほしい。
●学力向上	●GDにおける教科指導1もしくは、それに代わる、個別最適化と協働学習が生徒にとって一連の流れとなる授業の実践	①生徒の2割以上が、授業について自分の課題を解決するために皆と協働して取り組む授業であると評価する授業が8割程度ある。(生徒による授業アンケート) ②県や国などの学習状況調査と比較して、自校の平均が伸びていたり上回っていることを指標とする。	●全部の普通学級の授業で、『学び合い』の授業をもとにした授業チェックリストを用いて、授業実践し、評価する。	A	・全国調査結果を踏まえた校内研修を行うことができた。生徒アンケート結果から、協働的な学びができていると答えた生徒の割合は92%である。また、生徒の87%が授業に意欲的に取り組んでいる。88%が授業は分かりやすいと答えていることがわかり、当初の目標は達成と判断できる。 ・教師アンケートでは、8割弱が協働的な学びを取り入れていると答えている。今後は、ICT機器を利用した個別最適化授業の実現に向けての研修を計画している。	A	・協働的な学びができていると答えた生徒が92%もいるのは、「学び合い」の成果だと思います。 ・協働的な学びができていると答えている生徒が多いことが高評価。	
	●GDにおける教科指導2の総合的な学習時間における新たな取り組みにおいて、教師の学習コーディネーターとしての資質を磨く。	②新たな(英語によるコミュニケーション活動)総合的な学習時間は、主体的に学べたと答える生徒が8割を超える	・校内研として、佐賀市の研究指度も受けて、2年から3年の継続研究として取り組む	・総合的な学習の時間で、意欲的に調べ学習に取り組んだと回答した生徒が8割以上いた。 ・オンライン英会話や外部人材を取り入れたことで、生徒たちが生きた英語や海外の文化と触れ合うことができた。 ・佐賀市について深く学習することができた。	A	・オンライン英会話や外部人材を取り入れたことで、生徒たちが生きた英語や海外の文化と触れ合うことができた。 ・佐賀市について深く学習することができた。	A	・オンライン英会話やイングリッシュデイなど早く取り入れたら、継続して学び合いの教育を取り入れたらしっかり取り組まれていると思います。 ・生徒が自ら学ぶ姿勢をもっと出してほしい。
●健康・体づくり	●「安全に関する資質・能力の育成」	●「朝、自分で起きている」と回答する生徒70%以上 ●「健康に良い食事をしている」児童生徒80%以上 ●生徒の交通事故を0(ゼロ)にする	・小中連携組織の家庭の学び部会での推進や保護者への啓発(保健だより・食育だより)を行う。 ・登下校時の交通指導を年間を通して行う。 ・生徒会を中心とした啓発活動の推進	A	・「朝、自分で起きている」と回答する生徒は、80%以上だった。 ・「健康に良い食事をしている」生徒90%以上だった。 ・小中連携の家庭連携部会で、強化週間を設け、「家庭学習・生活がんばり表」の取り組みを行い、家庭と連携し、基本的な生活習慣の確立を目指した。 ・生徒の大きな交通事故はゼロであった。	A	・本来、起床、食事などは家庭教育であり、教職員がやるべきことでなく、教育委員会やヘルプレットなどを活用し、保護者に配布し、大人の教育を徹底すべきである。 ・広い道路でも横に広がらず縦に並んで走る様子(自転車)をよく見かけます。 ・朝自分だけで起きている生徒が80%以上もいる事はすごいことだと思います。 ・朝食や起床は保護者の協力が必要なので、PTAや地域と連携した取り組みを進めてほしい。	
	○(学校独自重点取組・任意)なし	○(学校独自成果指標・任意)なし						
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。 D 生徒指導事務があっても年間720時間以内の超過勤務時間実施100%	・定時退勤日の設定(水曜日) ・学校閉庁日の設定 ・部活動がイドラインの遵守、部活動休業日の設定	B	・定時退勤日を設定しているが、全員が定時に退勤することができなかったが、時間外勤務時間の減少はできた。 ・長期休業中の学校閉庁日の徹底はできた。 ・部活動休業日の設定はできた。	B	・時間外在校時間削減は、各職員の業務改善、意識改革が必要である。 ・定時退勤は定着するように繰り返し伝えてほしい。水曜日にはみんな早く帰る習慣が必要。	
	○勤務時間を意識した働き方を浸透させる。ワークアンドライフバランスを実現するために、教職員が自己管理の中のタイムマネジメントに関わる資質・能力を向上させる。	E 教育者として、健康で、かつ、充実した1年だったと答える職員90% C ライフステージをカバーし合う雰囲気がある学年主任と管理職全員が思う。	・衛生・健康管理委員会を年3回以上実施 ①毎月のゼロの日の取り組み 不祥事ゼロ ②そ・し・き・人対応を意識して業務 ③ライフステージをカバーし合う雰囲気があると答える職員90%以上できた ④コロナ禍明けで、コロナ禍以前に戻すのではなく、コロナ禍の知恵も生かした新しい学校行事等の工夫	・衛生・健康管理委員会を年3回以上実施し、職員の健康に配慮した取り組みができた。 ・日々、タイムマネジメントに関する呼びかけを行っている。4月から1月までの平均残業時間は32時間であった。 ・そ・し・き・人対応を意識して業務できたことと答えた教師は100%だった。 ・毎月のゼロの日の取り組みを行い、不祥事ゼロを実行することができた。 ・ライフステージをカバーし合う雰囲気があると答える職員90%以上だった。	A	・衛生・健康管理委員会を年3回以上実施し、職員の健康に配慮した取り組みができた。 ・日々、タイムマネジメントに関する呼びかけを行っている。4月から1月までの平均残業時間は32時間であった。 ・そ・し・き・人対応を意識して業務できたことと答えた教師は100%だった。 ・毎月のゼロの日の取り組みを行い、不祥事ゼロを実行することができた。 ・ライフステージをカバーし合う雰囲気があると答える職員90%以上だった。	B	・少しであるが、時間外勤務時間の減少を評価する。 ・時間外勤務が減少していることは良いと思う。在宅勤務やリモートにも取り組んでほしい。 ・先生の人員不足の深刻な状況の中で残業を減らそうという意識があっても、そうできない現状があるのだと思います。 ・時間に対する感覚はまちまちであると思いますが、突発的な事案等が出てきたとき、時間外としての対応は仕方ないかと思いますが、教育が時間で管理できればありがたいですが、難しいところだと思います。
(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目								
評価項目	重点取組	成果指標(数値目標)	具体的取組	達成度(評価)	実施結果	学校関係者評価 評価 意見や提言		
○特別支援教育	○集団作りの側面から、絆感を培う個別最適化された協働学習を進める際に、多様性を認める視点を重視した教育活動を行う。 ○個別の指導・支援計画の側面から、自立活動を生徒に関わる全ての職員が共有し、協働した教育活動を展開する。	①QUテスト11月調査で各学級学級生活満足群60%以上OR 6月時のQUより向上 ②特別支援学級担任を嫌がらない先生の割合100%	GD生徒指導3の取り組みを基本として ①コグトレ 境界域の能力について自他とともに理解を深め支え合う。 ②ワンクッション指導 自分の言いたいことを言う前に、相手の気持ちを聞く。 ③個々の生徒が自己開示できる集団作り ④弱点もリフレミングで長所に 個の弱点を、強みとする集団の育成	B	・特別支援学級担任と交流学級担任、特別支援学級支援員ともに情報共有を図り、生徒の学習面や生活面での支援に生かすことができた。 ・生徒が困り感を抱えたときは、保護者との面談を行い、その後の指導や支援の仕方を協議し、対応することができた。 ・QUテスト11月調査で学級生活満足群が、6月時のQUより向上した。 ・特別支援学級担任を嫌がらない先生の割合が約90%であった。	B	・全職員が特別支援教育に理解を深めている。生徒の困り感に対し、保護者と共に指導、支援を行っている。 ・以前と比べてはるかに特別支援学級が増え、おり、細やかに取り組まれていると思います。 ・一般のクラス、他校の特別支援学級、特別支援学校との連携を深めてほしい。 ・最終評価で、10%の先生が担任を進んで希望になったのかについて考え、今後を生かしてほしいです。	
●…県共通 ○…学校独自 ◎…志を高める教育								
5 総合評価・ 次年度への展望	・生徒アンケート、保護者アンケート共に本校の教育活動に対する評価は好意的であった。また、全職員で協働的な学びに取り組むことを通して、魅力ある学校づくりに取り組むことができた。この点は、次年度も継続し、更に発展させたい。 ・不登校生徒数の減少が課題。新たな不登校を生まないことをめざし、卒業後の進路実現にも力を注いでいきたい。次年度も引き続き不登校対策に力を入れて取り組みたい。 ・次年度も「特別支援教育の充実」、「オンライン英会話の充実」について、取り組みの柱を明確にして、今後の教育活動の指標を立てるようしていきたい。							